

INTERVIEW WITH PROFESSOR YAMAGATA'S STUDENT

田場 太基



私たち Q チームは、新型コロナウイルスの流行に伴い、対面授業からオンライン授業に移行したことで、ゼミを履修しようとする2年生や3年生がゼミの先生を選ぶことや、先生と学生を繋ぐことは今までよりも非常に難しくなっていると感じています。このプロジェクトでは、ゼミの教員と学生の両方の視点に注目し、ゼミについての基本的な情報やゼミ選びにおいて参考になる情報をリレー形式でお伝えしようと思います。

インタビュー記事では、APUの教授2名（APS教授、APM教授）とそのゼミ、そして各ゼミ生の声をお届けします。学生の意見も取り入れることで先生方の教授法などを知っていただくだけでなく、実際にゼミを受講されている学生の意見も知っていただきたいと考えています。

I. 基本情報

沖縄県出身、APS(アジア太平洋学部) 4年生7セメスター、専攻は環境・開発学科。

山形教授のゼミに所属し、主に障害者研究を行っている。趣味は音楽を聴くこと。最近感動した映画は「コーダ(愛のうた)」。

II. 山形ゼミに関するQ&A

山形教授のゼミに3回生5セメスターから約1年所属している田場さん。まずは、そのゼミに関する『Q』uestionに答えていただきました。

1. 山形ゼミの特徴について教えてください。

ゼミの特徴は、ゼミ生のテーマが多様性に富んでいることです。途上国教育、貧困削減、ジェンダー研究など多岐にわたるジャンルの研究を各自行っています。そして山形教授は「奇抜なアイデアマン」だと僕は思うんです。あれこれ指示を出すのではなく、「こういった問題意識を持つといいのではないだろうか、こういった違った側面を持つといいのではないか」とアイデアを引き出してくれる、これが、僕が山形教授のゼミに入って非常に面白いと思う点です。

2. 山形教授のゼミに入って驚いたことは何ですか。

山形教授のゼミに入って驚いたことは、国際生の割合が非常に高いことです。なので、ゼミは基本英語で進められます。日本語基準学生にとっては難しく怖気ついてしまう場面も多々ありますが、ゼミ以外の時間を用いて日本語でのフィードバックや教授に個別相談をしているので、ゼミの雰囲気としては緊張することなく取り組みやすいと感じています。

山形教授のゼミ形態や、ゼミでの課題量について教えてください。

ゼミの形態は、個人の研究に沿ったプレゼンがメインです。

ゼミの課題量に関しては、他のゼミに比べると多くないと思います。現在は1セメスターに1度発表の場が設けられるといいねという感じで。具体的な提出物としては、3回生の6セメスター目の研究計画書、4回生8セメスターの卒業論文のみです。他に各セメスターで一回程度のプレゼンテーションをします。比較的少ないと思いますが、僕個人的には、自由があるからこそ、自分で進めていかないと追いつかないと感じています。課題が無いからこそ自分で計画管理・時間管理を持ってやっていけばいいのかな、そういったコミットメントをしていけばいいのかなが問われると思っていて。そういった意味では、自己管理能力を試される場が山形教授のゼミだと思います。

4. ゼミに対する誤解にはどういったものがあると思いますか。

ゼミに対する誤解を一概に言うのは難しいですが、やはり「論文を書くことへの変容」は誤解として結びつく部分があるんです。というのも、卒業論文を書くことや提出物に対する大変さがあるとは思いますが、その部分だけをみて「ゼミは大変だ」「ゼミはきつい」とネガティブに捉えて避けるのは良くないと思います。「自分もその環境(ゼミ)に溶け込んでみよう」というトライする気持ちが非常に大事で、なんでもやってみる場としてゼミがあると僕は思います。「自分が何をしたいのか。」「ゼミの2年間の勉強を通して、何を学んでいきたいのか。」「どういった強みをもってAPUを卒業したいのか。」という問いをゼミの先生や仲間と意見を共有することができることは、ゼミならではの環境だと思います。ゼミでの経験・培った学びは今後の自分の財産になると思うんです。

5. 山形先生のゼミを5つの言葉で表現してください。

僕は「自己管理」、「問いを立てる力(問題意識を持つ力)」、「問いに対して再度問う力」、「将来へ活かす力を育む(明確にできる)場」、「他人から批判をもらう・他人に批判を与える力」だと思います。

III. 田場さんの研究に対するQ&A

山形ゼミという「自分を試される場」に身を置き、前向きな姿勢で研究を進める田場さん。田場さんの個人的な研究に焦点を当てた『Q』uestionに答えていただきました。

6. 田場さんが山形教授のゼミを選んだ理由はなぜですか。

ゼミを選んだ理由は「僕がやりたい研究テーマを先生が引き出してくれたから、先生の元で勉強したいと思ったから」です。僕が最初に研究したテーマは「障害者における自立支援の在り方」で、これに紐づく「障害学」に対する興味を引き出してくれたのが山形先生でした。しかし、僕が山形先生と出会ったときは先生のゼミが無かった時期で…。そこで山形先生に自身のゼミを開いてほしいと僕自身が提案したんです。そこでの山形先生との話し合いの場でも僕自身の研究テーマが深まりましたね。山形先生が専門にしている国際開発や開発経済の分野とは違った、「障害学」や「障害をテーマにした研究」なのですが。(笑)

7. ゼミの教訓で得た教訓を教えてください。

自分が何を手掛かりに今後の人生を生きていくのか(問題に取り組んでいくのか)という、問題意識を持つことの重要性が山形先生からの最大の教訓だと思います。そして山形先生のゼミという多国籍・多文化な学びの場を通して、研究していることの当事者に対する言葉遣いや相手への返答が非常に大切であることを感じています。例のようなことを研究するにあたって、良い側面とそうではない側面を知ることが大切で、研究を深めるほど研究の当事者との距離感が近くなるからこそ気を付ける必要があります。



田場さんとフィールドスタディー参加学生がバスケットボールを体験する様子。左から2番目が田場さん。

8. 今、取り組んでいる研究について教えてください。

今、僕が取り組んでいる研究は、障害当事者が裁判を起こした事例がある「日本の鉄道駅無人化」についてです。昨年参加した「フィールド・スタディー」での出会いがきっかけで、別府などの障害者団体と繋がることができました。このように、ゼミに入って自分のテーマを持つことで「人との繋がり」が増えたなと感じています。ゼミでは、**データや文献を調査することに加えて、身近にある地域の問題や社会問題にも目を向けることも大切だと思います。**また、「人との繋がり」は僕の中で常に大切にしていることです。

9. 今後はどのような研究テーマに興味がありますか。

これまで「障害者の社会参加」や「障害者の福祉制度の在り方」など「障害学」や「障害をテーマにした研究」で問われてきた課題がいくつかあります。日々、障害者が世の中に出ていくなかでその起点となった「**障害者運動**」、これに僕は非常に興味があるので、そういったものを今後研究できればいいかなと思っています。



現在オムロンで働いている元パラリンピック重量挙げ選手のジョさん、山形教授、田場さんらフィールドスタディー参加学生と共に。

IV. 将来のゼミ生に向けたアドバイスQ&A

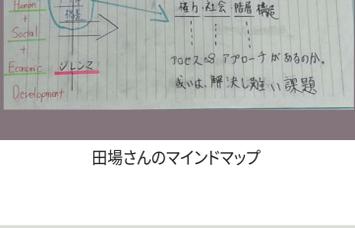
最後に将来、山形ゼミで研究するゼミ生に向けてアドバイスとなる『Q』uestionに答えていただきました。

10. 実際にゼミでの経験を通して、ゼミには3回生と4回生どちらで入ることをおすすめしますか。

僕は3回生でゼミに入ることをおすすめします。本当にこれでいいのかといった研究テーマに対する疑問や、研究テーマに関することをじっくり考える時間が必要だからです。4回生でゼミに入ると、それらについて悩み、考える時間はないと思います。

11. ゼミの面接を受けるために準備しておくことはありますか。

自分が興味のあることや研究したいことを具体化しておくことです。僕が実際にした具体的な方法は、一枚の紙の端に円を書き、その周りに興味があるものを書くことで、目に見える形にするという方法です。これによって自分が何を勉強したいのかよりも、自主的に学びたいことを明確化することができると思います。



田場さんのマインドマップ



田場さんとフィールドスタディー参加学生が、障害児のための放課後センターであるNGOユニテッドサークルからの講義を受ける様子。正面が田場さん。

12. ゼミの研究のために、日頃から心掛けていることや使っているリソースについて教えてください。

自分が一人の研究者であるという意識を持って、人と話す機会を積極的に設けることです。山形先生であっても、他大学の教授であっても、或いは本の執筆者であっても、自分から行動を起こすことが大切です。そして、日頃から本を読む。読んでいくなかで研究に使えるようなところは付箋でしるしを付けたり、ノートに纏めるようにしています。映画やドラマ(ドキュメンタリー)などに触れることも大切ですね。

最後に…

13. あなたにとってゼミは何ですか。

自分がこれまで経験してきた今後何を経験したいのか自問自答することによって考える場、つまり、僕にとってゼミは、「**自分がやりたいことを見つける場。**」です。

インタビューの感想

やはり最も驚いたのは、田場さん自身が山形教授にゼミの開講をお願いするに合ったことでした。田場さんの山形先生の元で学びたいという熱意を強く感じました。「人との繋がり」を大切にされながら、研究への強い思いとそれに対する意識を常に忘れることなく、日々研究に努められている姿勢は、今後ゼミで学ぶことを検討している私の心に非常に刺さるものでした。私自身も「自分がやりたいことを見つけ」、それに対して追求を続けられる人になりたいと思います。

インタビュー & ライター



名前: 柴田彩葉
学部: APS
出身: 日本
メッセージ: 日本 皆さん、こんにちは! 2021年秋からALRCSでQ-teamメンバーとして活動している柴田彩葉です。趣味は音楽を聴くことと、デザインをみることです。ProjectQに参加したことで、APUでの学びについて教授や先輩である学生の視点から知ることができ、私自身の学びを一層深めたいという思いが強まりました。今後もインタビューで知り、感じたゼミの魅力について学生の皆さんにお伝えしたいと思います!

インタビュー

名前: ロレタニジ・ケリー
学部: APS (ED)
出身: マーシャル諸島
メッセージ: ヤッコウ(こんには)!
3回生で環境・開発専攻のケリーと申します。旅行とウクレレを引くことが大好きです。私たちの記事を読むことにより、読者みなさんが先生方が教えてくださった教授法の中から、大切な知識を得られることを願っています。



「Q」とは
APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのかを知ることで出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてもらいたい、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。